

アメリカザリガニの繁殖抑止 —親個体の侵入阻止、巣穴破壊、人工藻による小型幼体捕獲— NPO 法人シナイモツゴ郷の会 長谷川政智・久保田龍二・高橋清孝

旧品井沼周辺ため池の一つでは2000年以降アメリカザリガニが大繁殖して二枚貝が減少しゼニタナゴが全滅した。2013年からゼニタナゴを復元するため、里帰り放流と合わせてアメリカザリガニの低密度化と取り組んでいる。2016年からは連続捕獲装置を設置して本格的にアメリカザリガニの駆除を開始した。

これまで、アメリカザリガニの駆除には、主にアナゴカゴなど誘引餌を用いたトラップが用いられてきた。アメリカザリガニの生息密度を減少させるには増殖個体数を上回る個体数を捕獲する必要がある。しかし、アメリカザリガニの強勢な増殖力を抑止するためには、十分な捕獲努力を長期間にわたり継続する必要がある。

当会は、連続捕獲装置で大型の個体を捕獲し、同時に捕獲されにくい小さな幼体個体をしばづけ漁法（人工藻による捕獲）と岸辺の草影など生息場をさで網ですくい取る方法によって捕獲している。他にも繁殖期には巣穴を掘って親個体を、周年にわたりプラスチック製の小型定置網を排水路に設置して遡上してため池へ侵入する個体を捕獲している。これらの方法により卵、孵化直後の稚ザリガニ、小型幼体、大型幼体・成体の全成長段階の個体を継続して捕獲することにより、低密度化の実現を目指している。

試験ため池の上段池では、2016年には連続捕獲装置1基当たりの捕獲数が100尾前後だったが、2018年には50尾以下と大きく減少した。また、2018年には2016～2017年に比べ幼体の捕獲数が減少した。これは、巣穴掘りによる巣穴破壊（27ヶ所で抱卵19尾）やノリ網などを用いた人工藻（しばづけ漁）による1,250尾（幼体含む）の捕獲を並行して実施した結果と考えられる。また、巣穴以外でもエンビ管を使った人工巣穴（牛見ほか2015）で5尾、人工藻で3尾の抱卵個体が捕獲できた。上段ため池では、巣穴で産卵する個体だけでなく水中の人工物の中でも繁殖が行われることが確認できた。巣穴を作れない構造のため池では人工物での抱卵個体の捕獲に使用できる可能性がある。

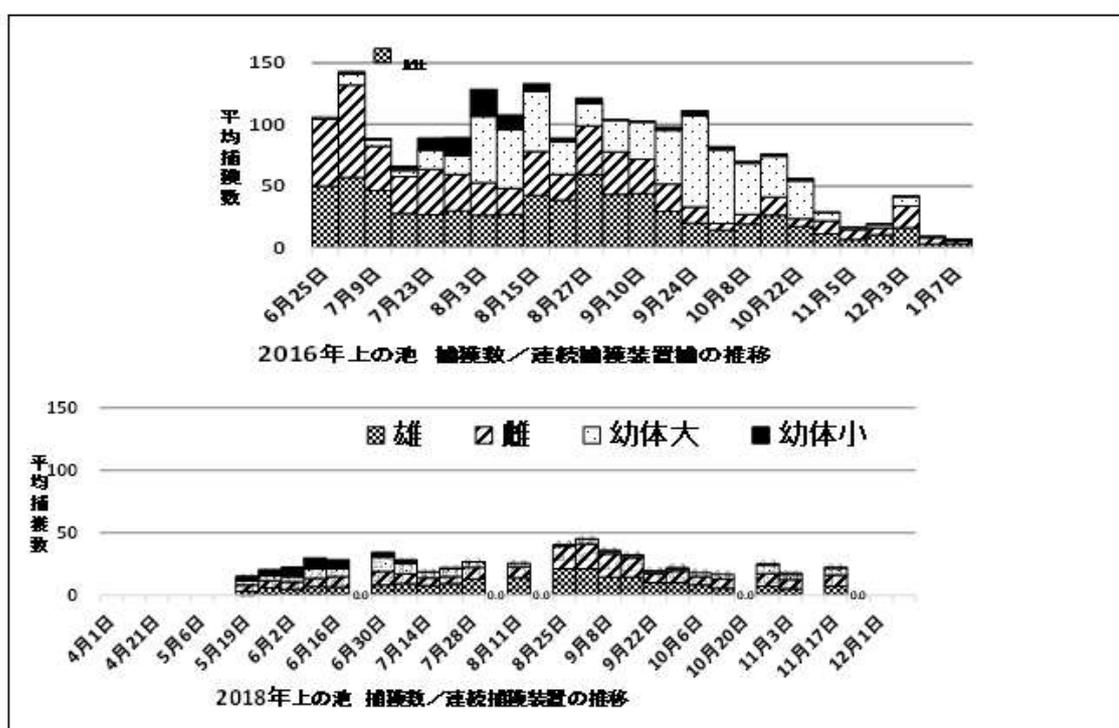
一方、2018年のプラスチック製小型定置網では、約1,500尾が捕獲され、この内138尾が抱稚雌個体だった。また、抱えられた稚ザリは約11,400尾（抱稚雌123尾を計測）だった。

アメリカザリガニは多様な環境のため池に生息し、それぞれに適応した繁殖していると考えられる。駆除を行う場合、生息場所での繁殖生態を調べ生活史や生息環境を考慮し、さまざまな捕獲法を使用することにより各成長段階の個体を捕獲することで捕り残しを少なくし、駆除活動を継続することにより繁殖

個体の減少と繁殖抑止が可能になると考えられる。

試験ため池ではアメリカザリガニが高密度で生息し、タガイ幼体の食害が確認されたが生息密度が減少することでタガイの再生産が確認されるようになった。また、上段池ではトンボ類のヤゴが多数確認され、下段池でも水生昆虫のミヤケミズムシが多数確認できるようになった。

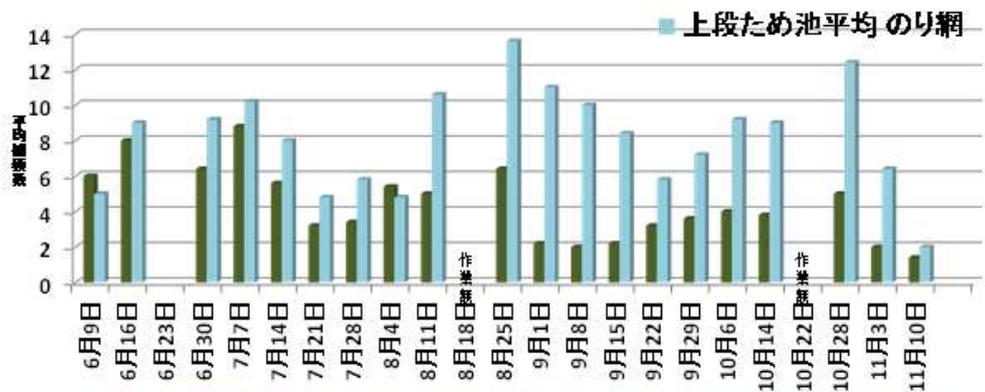
全国各地にはさまざまなため池が見られ、それぞれの環境に適応してきた動植物が見られる。近年、外来生物等によりその環境が変わり水生性の昆虫や動植物が減少・絶滅している。ため池における外来生物の駆除は、希少種だけでなく多様な環境により多様な生物を保全するためにも地域ぐるみのった重要な活動となってほしい。



杉の枝葉 438尾
 ノリ網 812尾
 計 1250尾



杉の枝葉とノリ網によるしばづけの平均捕獲数



上段ため池での巣穴捕獲数と抱卵(2018年)

	巣穴数	抱卵個体	卵数
巣穴	27	19	約3900
人工巣穴		5	約1200
しばづけノリ網		3	約590



定置網での捕獲数(抱稚ザリ・稚ザリ数)

	捕獲個体数	抱稚・卵個体	稚ザリ数
2017年	約720	14	約1100
2018年	約1500	138(123)	約11400